

子どもの体育嫌いをジェンダーの視点から考える

北海道教育大学 函館校 教育社会学ゼミ 木村研究室A
石川真由 高橋美沙紀 池内新汰

1. 本研究の目的

多様な子どもが運動を楽しみ、自らの可能性を伸ばせるような体育に向けた学校教育の課題を、ジェンダーの視点から検討する

学校体育は、すべての学習者に生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現することを目指している。しかし、その学習内容は、男性の教育手段として発展した「近代スポーツ」を中心に構成されており、体育の好き嫌いに男女差がある(笹川スポーツ財団2019、井谷他2022等)。函館市教育委員会が小学校5年生を対象に行った調査を見ても、「体育の授業が楽しい」と答える子どもの割合に男女差があり(図1)、男女間で15ポイントの差が生じている。

図1 体育の授業は楽しいかどうかに対する函館市小学5年生の回答

	小学校男子	小学校女子
「体育(保健体育)の授業が楽しい」と回答した割合(%)	72.1 (-1.3)	57.1 (-2.2)

【出典】函館市教育委員会「令和4年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査 函館市の結果概要」『(7)結果の概要③質問紙調査イ 体育・保健体育の授業について』p.6

学校教育における男女平等を推進する上で、ジェンダーのバイアスに気づくことは不可欠である。特に、意識やパフォーマンスに男女差があるのは「当然」だとみなされがちな体育は、学習者が浴び続けるジェンダー・メッセージの是正が必要になる(井谷2004)。

そこで、本研究では、多様な子どもが親しみを持って楽しめる体育に向けた課題について、函館市内の小中学生を対象に実施したアンケート調査をもとに検討したい。

2. 体育に関する児童の意識調査の結果

本研究では、アンケート調査を基にクロス集計と残差分析を行い、特にジェンダー差が有意に見られた3つの項目を取り上げる。なお、残差があった箇所は赤字にした。

調査期間	2023年10月12日~30日
対象者	函館市内の小学校3校の4~6年生
調査項目	①体育の授業の好き嫌いについて ②体育の授業の認識について } 上家ら(2013)を参照

①体育の授業の好き嫌いについて

クロス集計の結果(表1)、全体的に体育の授業が好きな割合が半数を超えるものの、残差分析の結果、その割合は男子で有意に高く、女子は「あまり好きではない」が有意に高い。

	好きではない	あまり好きではない	やや好き	好き	有意確率
女子(N=136)	4.4%	12.5%	25.0%	58.1%	0.001
男子(N=114)	4.4%	0.9%	17.5%	77.2%	
その他(N=3)	0.0%	33.3%	66.7%	0.0%	

②体育の授業の認識について

「体育で失敗がこわくなることがありますか」(表2)、「体育で自信がなくなることがありますか」(表3)についても有意差が認められた。全体的に「当てはまらない」割合が高いが、その割合は男子で有意に高く、女子は「当てはまる」が有意に高かった。

	当てはまらない	やや当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	有意確率
女子(N=136)	25.7%	22.8%	25.0%	26.5%	0.001
男子(N=114)	48.2%	14.9%	30.7%	6.1%	
その他(N=3)	33.3%	0.0%	0.0%	66.7%	

表3 男女別・体育で自分に自信がなくなるかどうか

	当てはまらない	やや当てはまらない	やや当てはまる	当てはまる	有意確率
女子(N=136)	32.4%	23.5%	27.2%	16.9%	0.001
男子(N=114)	55.3%	19.3%	17.5%	7.9%	
その他(N=3)	0.0%	33.3%	0.0%	66.7%	

その他、女子の「当てはまる」割合が有意に高い6項目
「体を動かすことは好きですか」
「体育の途中であきらめたいことがあることがありますか」
「体育で友達に見られていやだったことがありますか」
「体育の授業でがんばってもむだだと思ふことがありますか」
「体育をできればやりたくないと思ふことがありますか」
「体育の授業がめんどくさくなることがありますか」

3. 考察

(1)学校体育において、男女で異なる経験をしている。

調査の結果、同じ体育授業を受けているにもかかわらず、男子は肯定的に捉え、女子は否定的に捉えていることが読み取れた。

井谷(2004)は、体育授業で経験差・男女差が拡大するにつれ、運動やスポーツへの自信や有能感の差も拡大しているのが現状ではないかと述べている。本調査でも、同様のことが背景にある可能性がある。

(2)学校体育において、女子は劣等感を感じやすい傾向が見られる。

上家ら(2013)は、体育の苦手意識に対する下位尺度を「回避感情、比較感情、劣等感情、嫌悪感情」の4つで考えており、本アンケート調査からは、劣等感情に当てはまる質問項目で有意差が見られた。

また、件数は少ないが、女子だけでなく「その他」の性別を回答した子どもも劣等感を感じやすい傾向が見られた。井谷(2022)の調査結果でも、性の多様さを持つ子どもが体育に対して消極的な意見を持つ場合が多い。そのため、「その他」も見逃してはならない可能性がある。

女子の学校体育に対する否定的な認識がなくなり、多様な子どもが運動を楽しむことができるようになるにはどうすればよいか？

4. 提案

ジェンダー及び性の多様さから見た「体育嫌い」の声(井谷2022)を参照しつつ、ジェンダーの視点から今後の体育に向けた提案をする。

子どもとの関わりの視点から

・「女子なのに/男子だから」などのジェンダーバイアスが働く声かけ
・一方的な男女別グループ分け

・性別にとらわれない、個人へのアプローチ

学校・体育全体の視点から

・着替え、体操服、水着などに見られるジェンダーの決めつけ
・男女で分けることを前提とした学習内容や仕組み

・プライバシーが守られ、安心・安全な場所・環境をつくる
・生涯スポーツの観点を踏まえ、様々な能力や経験、性の多様さをもつ子どもと一緒に協力し、楽しめる学習内容を目指す

教師や学校社会に根付くジェンダーの無意識の偏見を捉え直し、特定の性別に劣等感を抱かせることなく、多様な子どもたちが楽しむことができる体育が重要である。

引用参考文献・URL

・井谷恵子(2004)「第4章第1節 学校体育とジェンダー」飯田貴子・井谷恵子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店pp.175-184
・井谷恵子他3名(2022)「カリキュラムの多層性からみた「体育嫌い」のジェンダー・ポリティクス」『スポーツとジェンダー研究』20、pp.6-19
・井谷恵子(2022)「沈黙する「体育嫌い」の声を聴く ジェンダー視点を中心に」及び「沈黙する「体育嫌い」の声を聴く セクシュアリティの視点から」<https://wan.or.jp/article/show/10220>(最終閲覧2023.11.1)
・上家卓・中道莉央・神林勲・新開谷央・城後豊(2013)「児童期における体育への苦手意識の構造及び測定尺度に関する研究(1)-性差、生年月日の差、学年差に着目して-」『北海道教育大学紀要 教育科学編』第63巻第2号pp.259-271
・笹川スポーツ財団(2019)「子ども・青少年のスポーツライフ・データ2019」https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/datalist/2019/index.html(最終閲覧2023.10.30)
・函館市教育委員会(2023)「令和4年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査 函館市の結果概要」『(7)結果の概要 ③質問紙調査 イ 体育・保健体育の授業について』p.6
<https://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2014032000615/files/R4zenkokutairyoku.pdf>(最終閲覧2023.10.30)

調査にご協力いただいた皆様のおかげで、このようなポスターを作成することができました。お忙しい中、今回の調査にご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。